

## 国際ペンクラブ東京大会 2010

9月23日から10月1日まで第76回「国際ペン東京大会2010」が東京と京都を舞台に開催されました。日本での開催は1957年、1984年に続き3回目。今回は「環境と文学『いま、何を書くか』」をテーマに、東京では早稲田大学を会場に、詩の朗読、セミナー、映画上映、講演、対談など多彩なプログラムが繰り広げられました。私も9月26日に行われた母校の大隈講堂での開会式第一部・二部、続いて夕方、京王プラザホテルで催された海外からの参加者歓迎パーティーに出席しました。



来日したのは85カ国・地域から約250人。開会式の第二部ではノーベル文学賞の候補ともささやかれているカナダのマーガレット・アトウッドさんと、フランス在住で華人系作家として初めてノーベル文学賞を受賞した高行健氏が講演。また歓迎パーティーには日本のペンクラブ会員や出版の関係者も参加、伝統文化の能楽も披露されるなど、ホットな雰囲気の中、歓談の輪が広がっていきました。

国際ペンは第1次世界大戦後の1921年に、「二度と戦争をしないように」と作家たちが集まって作った組織です。PENとは、Poets(詩人)、Editors(編集者)、Novelists(小説家)を指しており、それが筆記具「ペン」に通じているのが面白いですね。

日本のペンクラブは1935年創立されました。初代会長は島崎藤村、以下、正宗白鳥、志賀直哉、川端康成と続き、第15代の現在は阿刀田高で会員数は現在約2000人。設立の経緯から政治的には反戦・リベラル色が強く、今回のテーマ「環境と文学」も、戦争は最大の環境破壊という反戦の意味も込めているといえます。

開会式で出色だったのは、第一部で今年亡くなった井上ひさし前会長の詩「水の手紙」の群読。世界の水をテーマに人間の身体も水から形成されており、例えば墨田川の水はコロラド川の水とつながっている、といった深いメッセージを発していました。もう一つはフィナーレで鹿児島県・奄美高等学校の生徒20人余りによる地元の歌と太鼓、三味線に合わせた踊り。これには途中から海外からの参加者も踊りの輪に入って身振り手ぶりよろしく楽しんでいました。

ところで、歓迎パーティーで気になったこと。それは事情があったので、予定より30分以上も遅れて食事が始まったこと。です。7時過ぎになってもいろんな挨拶が続いて、ごちそうを前に空腹そうに我慢している参加者を見て、私はそれこそ日本の諺「花より団子」転じて「文学論より満腹を」を皆さんに呼びかけた思いに駆られたのでした。高尚な文化の世界に住む人も所詮、生身の人間。「腹が減っては戦ができない」のです。こんな思いは邪道でしょうかね？

